

同刊又云 420646A5A3

文春図書館

私の読書日記

原発事故解明、

×月×日

石川迪夫『考証 福島原子力事故 炉心溶融・水素爆発はどう起こったか』

(日本電気協会新聞部 3000円+税)を読んではじめて、あの事故の真相にかなり接近したと思った。

著者は、原子力安全工学の第一人者。日本原子力技術協会の初代理事長、国際原子力機関(IAEA)の日本代表などを歴任。今回の事故でも米科学アカデミー調査団とのハイレベルの会合に出席して、事実調査と原因究明にあたった。御年八十歳だから「事故解明は若い者の仕事」と思い、手を付けずにいた。「これはいかんぞ」と思ってこの本に手を付けたのは、二〇一二年。何が「いかんぞ」

なのか。NHKが何度も放送したパネルの事故説明がまちがっていたから。大方の読者が頭に描いている説明も、原子力関係者が頭に描いているストーリーも同じようにまちがっている。

「炉心溶融と水素爆発」があの事故の核心部分。それがどのようになぜ起きたのか、そこがわからないため「いまだに福島事故についての明快な説明がなされていない」。あらゆるデータを再解析した上で、福島事故の全貌を書いたのが本書。素人には読みにくいのが、実証的論理展開に迫力がある。福島事故の推移がますますとろなく描かれる(なぜ各原子炉のメルトダウン時間がずれたか。四号機はなぜ爆発したか)。なるほ

ど本当の専門家はここまで解明できるのかと驚く。これまで日本のジャーナリズムに氾濫していたエセ専門家たち(特に原発反対派)の妄言(現代の迷信)にあきれる。軽水炉の意外に強固な安全性が、スリーマイル島事故の精密解析とその後十年間に及ぶ日米独原子炉暴走臨界実験から導かれる。暴走させても「燃料棒がドロドロに溶けて……」という映画「チャイナ・シンドローム」のようにはならないのだ。ところがNHKは、そのような事故が起きたと図解した。事実、燃料棒の「被覆管シ

ルコニウム酸化被膜が融点が高く強靱なため、あのタイプのメルトダウンは起りえないし、事実起らなかつた。燃料棒破損による放射能漏出はきわめて少く、放射能による直接死者はゼロのレベルにとどまった。福島事故は原子炉の意外な安全性の証明になったが、日本の政治指導者のダメさかげんもあらわにした。

菅首相が現地の視察飛行などに血道をあげず、「落ち着いて後方支援に取り組んでいけば、2、3号機は助かった、というのが私の結論」。あの時、官邸に集合していた政府首脳たちは「何ひとつ役に立たなかった」。

菅首相が現地の視察飛行などに血道をあげず、「落ち着いて後方支援に取り組んでいけば、2、3号機は助かった、というのが私の結論」。あの時、官邸に集合していた政府首脳たちは「何ひとつ役に立たなかった」。

ノンフィクション作家
立花 隆



たちばなかし 1940年長崎県生まれ。『宇宙からの帰還』『がん生と死の謎に挑む』ほか著書多数。この連載の6年分が収録された新刊『読書脳 ほくの深読み300冊の記録』(文藝春秋)が刊行されました。